SEED　～感染する魔術～

”太った猫”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＥＥＤ　～感染する魔術～

【Ｎコード】
Ｎ８４９５Ｂ

【作者名】
”太った猫”

【あらすじ】
あふれかえんばかりのいかれた魔術師達の話をしようか

序文（前書き）

オカルト関係の本を資料として読み漁った時に見た夢のメモ書きから、たぶん嫌いな人は嫌いだと思うので、まぁこんなんもありかなぁ程度でご容赦下さい。

序文

『世界は間違っている』嗜好だけであれば、ソレはさしたる問題では無かった。しかし、それは一つの指向性だった。
ソレを想ったのが、ただの人であれば、ソレは、さしたる問題(ちから)では無かった。

しかし、幸いにも、最悪にも、男には才能があった。パズルのピースを一つづつずらして全く別の絵を完成させる。そういう才能が男にはあった。いや、在(あ)ってしまった。

魔術とはすなわち我を通す才能だ。世界の認識(おもいこみ)に自分の認識(おもいこみ)の方が絶対的な真実だと認識(つきつける)させる才能だ。

問答無用、これこそが真実なのだと世界の在り様を変える。これは、そういう才能だ。

魔女達に祝福を

魔女達に祝福を与えよ…、魔女達に祝福を与えよ…、魔女達に祝福を与えよ…

男の頭の中では常にその声が囁かれていた。

そうして繰り返されるその声に

いつしか、男の声が加わる。

魔女達に祝福を与えよ…、魔女達に祝福を…、魔女達に祝福を与えよう…！！

二つの声はやがて混じわり、一つの呪（しゅ）を紡ぎ出す。

「「魔女達に祝福を」」

序文（後書き）

感想を書いて、面白いと言ってくださる方がいらっしゃれば続きます。

読まれる世界（ミス・リード）

「ようこそ、神の文字列の支配するこの世界へ、私はこの世界を訪れる者の水先案内人、ミス・リードだ」そいつは、その真っ赤な唇から吐き捨てるようにして言葉を紡いだ。

呆然としている間にも、そいつの言葉は続く。

「そう、ミス・リードだ。正しいことを見つける為の瞳を差し出した。ミス・リードだ。では、ここに象徴（サイン）を、この世界に在り続け、君の求めるものをさがすための記命録（きめいろく）に象徴（サイン）を」その両の瞳を隠した眼帯の下で、そこだけ真っ赤な唇から紫煙を吐き出しそいつは言った。言うと同時、一冊の真っ黒な本を何もない空中から取り出すと、その真っ白な頁（ぺえじ）に僕の左手を挟み込む。

「さぁ、さぁ、儀式は終わり、これで君の自由は拘束される。さぁ、さぁ、魔女を捜せ、君の君の為だけの魔女を、君の、君の願望を叶えるためだけの魔女を、正しき事を聞き分ける耳さえつぶした。ミス・リードの名に於いて誓約はなされ制約は成された。さぁ、さぁ、この腐れた物語の主人公。君の歩いた後にこの世界の物語は削られ、君の物語がそれらにとって変わる。さぁさぁ、魔女を捜せ、それだけが唯一、君に与えられた選択」

言うと彼女はそのねじくれた爪の生えた指を差し出し、肩にそれを喰い込ませて、唄うように言う。

「始まりは、一冊の本。そこからあふれかえった文字列を並べ替（シャッフル）え（ル）て、並べ替（シャッフル）えて、混（シャッフル）ぜこぜにして、ごちゃ混（ミックス）ぜにして、冷蔵庫で冷やして、レンジでチンして、沸騰させて、お鍋で暖めて、それで、

できたのがこの世界、さぁ、さぁ、魔女を捜せ！！！」

言葉とともにその扉は閉じられ、Ｂｏｍｂ（ぽむっ）！　と可愛らしい音を立てて消失する。

魔術師

そいつはあまりにも奇天烈(きてれつ)だった。その意味が、浸潤する。

吸血鬼(ヴァンプ)に血を吸われて法悦(エクスタシィ)を得る吸血中毒者(ブラッドジャンキー)、現実を闊歩する死体、恋する屍体愛好者(ネクロフィリア)、獣化(ゾアントロピー)の兆候をその身に刻んだ変質者(チェンジド)、その中にあってさえ、彼は異質だった。黒一色の服装に、金と銀の刺繍は生物的な印象を与え、きわめつけはサテンのマント、それはこれ以上ないほどに、彼の存在を、魔術師としての彼の存在を印象づけていた。

そいつが、目の前に止まり言葉を発する。

「制約と誓約に従い。私は、この世界の成り立ちと君の為(な)すべき事を示そう。魔女を捜したまえ、そいつが扉であり鍵だ。それがどうやって現れるのか、それがどうやって存在するか、そんな事は私の知った事ではない、ただ、君の魔女を捜したまえ、では、頁(ぺえじ)をめくろうではないか、さぁ、君の、君だけの物語を始めよう」その瞳は、深遠なる狂気の色に懲り固まっていた。

そいつは唄うように歩く、その存在そのものが唄となって世界に響く「奇異、奇妙、奇天烈、かつ奇想天外、その体現者、それこそが魔術士、世界は優しいと勘違いするほどには残酷だ。そうして私は悦楽(かいらく)の夢を見る」

男は唄い続ける、いや、その存在が唄う文字列となって滲み出る。

「叶わぬ夢を追い続け、叶ったその瞬間に望みを無くす、絶望せよ、絶望せよ、徹底的に絶望せよ、そこに真実はある、そこにこそ真実はある。そこにしか真実は無い」

魔女喰らい・魔女狂い

「言語術式砲塔（バベルカノン）、それが世界を変えた号砲の名前だ。たったひとつの魔術師の才能、それしか持たぬ一人の魔術師の才能（きょうき）、なぜここに居（ゐ）るかは問わぬ。なぜここに在（あ）るかは問わぬ。望みを叶える鍵はお前の願望、その扉こそが魔女だ、私は敗残者、望みを次代に繋ぐために、誓約にもとづき扉を開こう、魔女を見つけるための願望器」うらぶれた路地にぼろぼろのフードをまとった者が言う。

「さぁ、私の手を取れ、新たなる物語」

「そこまでよ、『魔女喰らい』」

「お前こそ、だ。『魔女狂い』」

「自身の願望器を亡くしたのなら、手を出さず、口を出さず、沈黙を貫け、『魔女喰らい』」

「お前こそ、もはや自身の遺志に引きずられるだけの屍体（そんざい）の分際で手を出すな『魔女狂い』」

そうして、現れた二人（そいつ）目もやはり、いかれていた。けぶるような熱気の中、黒い皮の異装で全を固め、あちこちからぶら下がる鎖のじゃらじゃら、じゃらじゃらとした音が耳障りだ。

「「ならば、いつものように結末（おわり）を始めよう、既に書かれてしまった物語を、未だ変革されない物語を」」

「「ならば、始めよう。ならば始めよう、己の意志を貫き通す為の戦いを！！」」

「「さぁ、構えたまえ、用意したまえ、その自身の心の在（あ）りようを準備したまえ、死にたくなければ」」

「告げよう。この世界に記命(しる)された我が名を”絶望から始まる織りなす道”」

「では、我も告げねばなるまい。この世界に記命(しる)された我が名を、止(とど)まることを知らぬ、それが我、”全人願望”だ、そしてこれが、これこそが”全人願望”だ！！」

そうして放たれたのは、欲望の光、その光の中に居座るのは、おどろおどろしい斑模様の蛙、その異様に巨大な口が人間の言葉をしゃべる。

「また、無理(つきすすむ)を通す気か、我が愛しい娘」

「Ｉｔ' ｓ　Ｒｉｇｈｔ（その通り）、Ａｒｅ　Ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ（準備は良いか）？　Ｂｉｇ　Ｍｏｕｔｈ（大口）」

「ああ、いつでもだ、では、選べ、何を我に差し出すか、全ての望みには対価(だいしょう)が必要だ、さぁ、選べ、敵の血肉、自身の血肉、差し出されることごとくを喰らって汝が望みを果たそう、我が愛しい娘よ」

「代償は敵の流す血、だが、その前に、いつものように我が肉の痛みを差し出そう、未だ肉を持つ故の苦痛を差し出そう」

そう言って彼女は　自身の指を喰いちぎり、それをじゃらじゃらとしゃらしゃらと鳴り続ける鎖で補填し、皮のベルトでそれを縛(くく)り付ける。ああ、だから彼女はがらんどうなのだ、レザーのスキンで覆われた半身と、その傷口のようなファスナーはまさしく彼女自身の傷口なのだ。

全人願望

「何を驚く、新規参入者、代償魔術、願いを叶える代わりに何かを差し出す非常に古典的な魔術だ」

「さぁ、全人願望の前に平伏せよ、『魔女喰らい』、所詮、他人の願望器を自身に当てはめたところでそれはあくまで似たものでしか無い、もはや真実を手にすることはもはやあたわず。それが貴様の絶望だ」

散文的な術式に答えて、大口と呼ばれた紫の斑模様の蛙が、彼女の云う絶望を力に変えて放出し、それに男が呑まれ、そして、壁にその形を人型の染みとして焼き付けた。

しかし、じゃらじゃらとじゃらじゃらと鎖を鳴らす女は、再び、自身を切り取り自身の魔女に放り投げ、

「そういえば、あなた方の教義は絶望だったわね」呆れたようにもはや半面を失くした女が、残りの革に包まれていない半面を器用に動かし言う。

「そう、始まりは絶望」荘厳に壁に染みついた人型が言い。その言葉は重厚にに響いていく。

「行く手にあらゆる絶望が転がっているのは想定済み」十字路から現れた髪を振り乱し、素足をざらざらの路面で削り続ける女が言い。

「だが、あれほどの絶望は無い、あれほどの絶望に未だ出会った事は無い」両の瞳から血の涙を流す少女を抱えた少年が昏い声で唱和

する。

「「「だから、その程度では止まらない、それは止められる程の絶望ではない」」」一人の言葉に一人の言葉が重なるように次々と次々と顕れる人とともに言葉の呪詛が続く

「だから、お前こそ、立ち止まれ『魔女狂い』、この絶望に呑まれろ”全人願望”」再び自身を形作った男が、深淵を覗かせる昏い瞳で告げ、その声に答えて、顕れたヒト型どもの髪が、伸び結合し結合(らく)し、一つの檻を形作る。

「囚われろ、アラクネの織(おり)」言う言葉を無視するかのように、女が無造作にその澱の中を歩く

その糸の一つを裁(た)ち切る度に、自身の身を何かに置き換えながら女が歩く。

「もはや、立ち止まることなど、できるものかよ、それが”全人願望だ”そう、それは、恐怖に追い立てられた願望故に、立ち止まることは死と同じだ。立ち止まったら全ては終いだ。死とは停止だ。そこで止まってしまうと言うことだ。だから、立ち止まらる事などできるものかよ、それが”全人願望(わたしたち)”だ」

「「しかし、この絶望と欲望が交わる先は、すでに交わることのない終末、既に記述されてしまった結末(ものがたり)、だから！！」」

そうして、そいつらが、一斉にこちらを見る。二対の瞳が、四対の瞳が、見えざる眼差しが一筋の光明のようにぺぇじを飛び越し、お前を見る。

「「未だ、目覚めぬ物語よ、未だ記述されない物語よ、未知なる者よ、新たなる結末よ」」

「「「「「さぁ、魔女を探せ、魔女を捜せ、魔女を探し出せ、おまえだけの魔女を捜し出せ、繰り替えされる運命の輪（ルーチン・ワーク）を止めて、斬って、ごちゃ混ぜにするのは、いつも、いつも新たなる登場人物（まじょ）だ」」」」」

魔女

そうして、それは、唐突にやって来る。空間を押し分けるように存在を掻き分けるようにして

「きゃはっははっはあはははあああああああ」耳障りな笑い声とともにそいつは登場する。黒のトンガリ帽子を目深に被り、その身を包む黒の衣装(がいそう)に、血に汚れた包帯が生き物のように、その肢体に絡みついている。その衣装(いそう)効果は、世界が二次元に凝縮されたかのような錯覚を産み出す。

「捜し物は、わぁたしぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」

「「そうだ、お前が！！」」

「そぉおぉお、それが、わぁたしぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ、だといぃぃぃぃってるぃぃぃぃのぉ」

その少女の肩の上に乗るでたらめな形をした人形の白い鳩の首(かお)が、その存在を告げ、ようやく少女(かのじょ)自身が声を紡ぐ。

「さぁ、我が名を告げよ！　告解せよ”我が罪を”我は魔女、契約(なんじ)の鎖に縛られし獣、契約(なんじ)者がその契約と共に在る限り、我は契約(なんじ)者の剣となり盾となり契約(なんじ)者が鎧となろう、では、告解せよ”我らが罪を”」吐息がかかるほどの間近でその貌(かんばせ)が告げる、その濡れた紫の唇が告げる。波打つ銀の髪の一房が触れる、促すように血の色で描かれた神の眼(まなこ)が載る目隠しの下の見えざる瞳が、促すように向けられる。

その言葉は、自ずと沸いてきた。

「”暴かれ続ける真実の埋葬者”」

そうして、この世界で魔術師としての在り方を選ぶ。

「”そう、それが原罪、それが我らの現在”、では、制約を始めよう」

「ざっくばらんに、ざっくばらんに、ジャック・バロンに相談して見よう」言って、肩の上に乗るでたらめな人形に話しかける。

「そぉぉおおんな絶望は見たことがない、だから、わたしは、私達はそれに縛られない」その呪文は、この場を支配する制約を通り抜けた。

「私達は不可分、同じ契約、同じ制約の元に共にこの世界を歩む事を決定(うんめい)づけられた存在」

「埋葬され続ける真実、だから、都合の悪い真実は、私達(ここ)に届かない」

「そうして、古き物語達は新たなる登場人物に道をあける、その誕生を祝うように、呪うように」

そうして世界は変容し、物語は加速(つづく)する

魔女（後書き）

第一部終了、続きが読みたいという奇特な方がいらっしゃったら第二部を書き始めようと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8495b/

SEED　～感染する魔術～

2010年10月9日11時54分発行